
零崎永識の人間忘却

壺厘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎永識の人間忘却

【Nコード】

N6861W

【作者名】

壺厘

【あらすじ】

零崎永識――それは一賊に忘れられた殺人鬼の名。

彼が一賊に帰還するとき、いまだ開かれぬ物語の1ページがめくられる……。

これが初投稿です。変なところがあるかもしれませんが、宜しくお願いたします。コメントとかいただけるとうれしいですw

刀語の項目を追加しました。次の更新（第七話）から、それとなく

絡んでいく予定です。更新完了。

始ノ語

殺し名第三位——「零崎」

常に忌避を持って語られる、殺人鬼の一族。

血縁でなく、流血でのみ繁がる一賊。

例えば、「マインドレンデル自殺志願」 零崎双識。

例えば、「シームレスバイアス愚神礼賛」 零崎軌識。

異端でしかなく、異様でしかない彼ら。

けれど彼らは愛を知っている。

家族愛を。

それこそが、彼らが忌避される最もたる理由であり、彼ら唯一の人間らしさであるのだ。

家族を愛し、家族を至上とする。

家族を害するものには一丸となり、戦う。抹殺する。

——、ここにもそんな殺人鬼が一人。

名を零崎永識ぜろぎながしきという。

二つ名は「不死身の殺人鬼」

家族からさえ忘れられた彼が一賊に帰還するとき――――

「何が起こるのか、とね？」

私は過去を知るのみ。未知に対する影響力は存在しないも同じなのだよ。

であるからして、答うるなら一つ。

私は何も知らん、若人よ、君等に未来は任せよう。

せいぜい努力するがいいさ」

第一話 「やっとお出ましかい？」

ここは都内の高級ホテルの一室。中では三人の男が向かい合って話していた。

針金細工のような体つきで、悲しいくらいに背広が似合っていない男——零崎双識。

麦藁帽子をかぶり、手には釘バットを持った男——零崎軋識。

燕尾服を着こなし、音楽家のような印象の男——零崎曲識。

零崎一賊のスリートップがこんなところで何をしているのかという——、

「アス、トキ、君たちに集まってもらったのは他でもない、これを見て欲しかったんだ」

珍しく真剣なようすの双識に、二人は、やはりレンはただの変態ではなかったのだ、と考えを改める。

言うと同時に、双識は二人に見えるように携帯を取り出した。否、彼が見せたかったのは、正確には画面に写っているメールなのだが。

「……………」

そして数瞬後、双識は双識であり、変態でしかなかったのだと二人は思い知る。

そして、更正という一抹の希望にかけて、出来るかぎりの優しい言葉を掛けてやる。

「なあ、レン、俺は——、自分で言うのもなんだっちゃが、普通の奴らとは色々と考え方が違うっちゃ。

っちゃから——、その、こういうのはちょっと、分らないというか……、理解できないというっちゃか……」

なにやら歯切れ悪く、目をそらすようにしながら、軋識が答えた。同意するように曲識も一つ、小さくうなづく。

「うふふ……、遠慮することはないよ、二人とも。

私も少々驚いているんだ。

素直な意見が聞きたい。」

「ならば、はっきり言うのも……、悪くない」

痛いと言現することが正しいのであろう沈黙を破ったのは、曲識だった。

「レン、しかし、僕はこういうことに詳しくない。

この言葉——ろりろりぷれい（……）、とはなんだ？
知らない単語が多くてな。

だが、新しい言葉を知るのも……、悪くない」

一瞬で顔が青ざめる双識。

携帯の画面を確認し、なにやら操作して、もう一度二人につき出した。

「アス、トキ、君たちを集まってもらったのは他でもない、これを見て欲しかったんだ」

うふふ——、と笑う。だが、その笑いはさっきと違い、少しひきつっていた。

「レン・・・、さっきので本当に誤魔化せたと思ってるちゃか？」

「うん？ 一体なんのことだい、アス？」

「いや・・・、だから——」

「うん？ 一体なんのことだい、アス？」

数瞬前のことはなかったことになったらしい。

「別にね、私はロリロリは嫌いではないよ？
だけどね、公私はしっかり分けてるさ。」

うふふ——まあ、私から言わせてもらうなら、ロリというのは小学生までだと思うんだよ。

中学生になるとね、色々とバイーンな感じの子もいるだろう？
そう・・・、ロリなのに巨乳というタイプだ。

しかし、しかしだよ君たち。

間違えちゃいけない！

ロリというのはそもそも未成熟な軀に萌えるものだろう！！

であるからして——————————」

むしろドツボに嵌まっていく双識を無視し、軋識と曲識は携帯を見つめた。そこには、確かに双識が自分たちを呼び出すのに相応しい、一賊全体に関わる一通のメールが表示されていた。

「・・・ちゃ。」

トキ、この・・・『零崎永識』、聞いたことあるっちゃか？」

「アス、買いかぶらないでくれ——、アスが知らないなら僕が知っているはずもないだろう。」

レン、どういうことだ？

新しい家族というなら、それも悪くない。

しかし見る限り、そういうわけでもなさそうだ」

その言葉に「ロリの神秘性」について語っていた双識は、やっとこちらの世界に戻ってきたようで、内心、双識に一賊の長兄を任せたいものか迷っていた軋識はほっとした。

（暴君のことがあるから、ロリはちょっと否定できないところもあるっちゃし・・・）

「アス、どうかしたかい？」

「い、いや、なんでもないっちゃ」

「うふふ——、じゃあ本題に入ろうか。」

このメールは一昨日私のところに送られてきた。

文面から分かる通り、送り主は『零崎永識』。

だと私はこんな名前、聞いたことがなくてね・・・、君らもそうだろう？」

二人は小さく、はつきりと頷いた。

（色々偏ってるっちゃが、レンの家族愛は度を超している・・・っ
ちゃ。

そのレンが知らないとなると――）

「ニセモノ・・・っちゃんか？」

「ああ、私もそうじゃないかと思っている。

君らに集まってもらったのも、そういうわけなんだよ。」

なにが、どういうわけなのか――、通じない者はここにはいない。
い。

「ひさしぶりに、かるーく零崎を始めるってことっちゃんね？」

「それは止めてもらいたいものだ。
家族で争うなど、愚かな過ちでしかあるまい」

響く、四人目の声。

それは、いつの間にか開かれた扉の先から聞こえていた。

双識が小さく笑う。

「うふふ――、やっとお出ましかい？

零崎永識くん」

第一話 「やっとお出ましかい？」（後書き）

遅くなってしまう申し訳ありません。一話目の投稿です。

次も早めに投稿できるよう努力します。

感想、アドバイスなど大歓迎です！

（2011／11／12）追記・修正しました。

第二話 「私の親類よ」

「これは、私を誘い出したということなのかね？」

家族ぐらい信じてくれてもいいだろうに」

大げさに「零崎永識」名乗った少年は肩をすくめた。

おそらくまだ義務教育を終えていないであろう姿と時代がかった口調が違和感を醸し出している。

彼自身はどこにでもいそうな特徴のない中学生だということが、その違和感をさらに増している。

「いやいや、家族であろうとやっていいことと悪いことがあると思うんだよ、永識くん。

ここ一週間くらいの気配は君だろう。

本当に気が散って、気が散って……ご苦労さまだよ。

うふふ——でも、失敗だったなあ……。

こんな可愛い子なら、ストーカー大歓迎だったのに！」

わざわざこんな面倒なことしなくてよかったね——、そう言って双識は頷いた。

曲識と軋識はやっと状況を掴むことができた。

(よう)

するにレンにいいように使われたってことっちゃね・・・)

別にそれは構わないが、それより心配なのは新しい家族らしい彼が、いきなりの双識の変態発言に引かないかということである。

だが、その心配は杞憂だったようだ。

「ふむ、私に可愛い、か・・・。

そのような言葉、久し振りに聞いた。

して、私の親類よ。私のことをどこまで知っている？」

(あの双識に真顔で返答・・・！？)

トキと並ぶレベルの変人ちゃ・・・！？)

とりあえず、自分や——例えば、人識には不可能なことである。

「うん？

私たちの会話を聞いていたなら、それは愚問というものじゃあないかい」

「いやいや、私はそこまでの記録者ではない。」

少なくともハイエンドはありえんよ。

不覚にも、同志を見つけ興奮してしまつてな。

ちなみに私は、ロリ巨乳はありに一票だ。」

一瞬の静寂が場に満ちる。

片や、互いの實力を知り、好敵手として認め合うような。

片や、またしてもどうしようもない変人の登場に諦めるような。

そんな空気。

「・・・もう、僕は帰っていいのか、アス？」

今回、僕がここにいた意味なんてなかっただろう？——、という顔で曲識が問い掛けると、軋識は、

「俺ももう帰りたいっちゃ・・・」

でも、おまえ次かなり出番あるだろう——、という顔で答えた。

そして、二人で大きな溜め息をついたのであった。

第二話 「私の親類よ」 (後書き)

やっと二話目の投稿です。

400アクセス突破しました！

読んで下さった方、お気に入り登録して下さいありがとうございます！

感想、アドバイス等お待ちしております。

次話ー「音楽家だ、僕は」では、ついに永識の二つ名の由来が明らかになります。

第三話 「音楽家だ、僕は」

「――で、零崎永識といったっちゃか？」

一体何者なのか・・・、全部話してもらっちゃうよ」

こうは言ったものの、軋識は永識が一賊の者だということは確信していた。

（ここまで分りやすく主張してくれているっちゃん、な・・・）

「私の親類、分かりきったことではないかね？」

私の正体などに意味はない。

そもそも前提として、私は過去の残り香とでも言うべきものなのだ。

現在たる君らには、あまり関わるべきではないのたよ。

これすらも、私がそうあるべきと定めているだけなのだがね？

ふむ・・・、まあ、君らに協力してもらうためには、まずこちらを理解してもらわなければならないようだ。

私は――、零崎永識。

「不死身の殺人鬼」と呼ばれたこともある。

永い時間、裏に表に零崎一賊を観守ってきたと自負している。

500の巡りを超える、永い間な。

今代の零崎、私の親類よ——これで満足かね？」

長ったらしい永識の語りだったが、三人はしっかりと聞いていた。
聞き流せるレベルの話ではなかった。

永識は驚きを隠せない三人にニヤリと笑った。この反応を予想していたのだろう。

「・・・それは、『不死』というより『不老』なんじゃないかい？」
もつともな双識の質問を、

「不老の存在などいるか」

と永識は一蹴する。

どうやら、「不死」にこだわりでもあるらしい。

「不老でなく不死——、人外も悪くないということか？

正直、驚きを隠せない。

初めてでな、・・・吸血鬼なる人物に会うのは。

なかなか、悪くない——いや、人物というのは正くないか。

謝罪する。

・・・後で、サインを貰えないか？」

軋識は弟が乱心してしまったのかと、必死でツツコミをいれた。

「・・・っちゃ、トキ、絶対違う！」

とりあえず吸血鬼違う！」

その必死さたるや、双識のときとは比べものにならない。

「私もね、トキ、一度は永識くんの嘘とかを疑ったほうがいいと思うよ。」

それに、決め付けは悪いと思うよ——もしかしたら、アンデットかもしれないじゃないか！」

さらに、珍しくマトモなことを言う双識との二人に説得され、曲識はふてくされるように返答した。

「音楽家だ、僕は。」

悪くない——悪くないが、喜ばしくもない。

理由も聞かずに否定されるなどということとは。

・・・さっきの発言、この永識という少年、まったく心音を変化させなかった。

すばらしいリズムだ。

語調も何一つ変わっていなかった。

まったく心を動かさずに嘘をつける者など、僕は知らない。

レン、アス、二人がどうして嘘だと思うのかが、僕には分らない。」

曲識がここまでいうならば、冗談ではないのだろう。

——だが、ならば彼は本当にそんな永い時を生きているというのか・・・？

第三話 「音楽家だ、僕は」 (後書き)

大きな動きがなくてすいません・・・

後少しで舞台も変わりますので気長にお待ち下さい。

第四話 「もうホント黙れっちゃ!」 上

「では・・・、私に関する考察は終わったかね。

もしそうならば、話を進めてもよろしいかな？

ああ、一応主張させてもらおう——私はただの人間だよ。

魔法は使えない、超常の存在と関わってもいない、零崎の殺人鬼だ」

静かな宣言。

けれど、それは確かに数百年という永い年月を感じさせた。

(でも、にしては何か違うというか・・・。

こう——ブレるというか、ふらふらしているっていうか？

ま、カワイイ弟は大歓迎だ)

うふふ、・・・あれ？

私より年上だから、お兄ちゃん？

ロリ兄上？
・・・トキの言葉を借りるなら、悪くない、
ね。

「ああ、構わないっちゃよ」

双識が答えようとしなかったので、しかたなく軋識が答える。

「では、単刀直入に言おう。

私は零崎永識としての使命のもと、私の親類たる君らを仕舞わせてもらいに来たのだ。

どうだろうか？」

仕舞う——！？

軋識は、いきなり永識の体のはじけて、ブラックホールのようなものが現れる、という想像してごくりと唾を飲み込んだ。

「ここは長兄として、私がまとめるべきかな。

永識くん、その仕舞うっていうのは何かのプレイのことなのかな？

もしそうなら——、少々その話を詳しく教えてくれないかな。

同好の者として、非常に興味がある」

「もうホント黙れっちゃ！

この存在シリアスブレイカー！」

いてもたってもいられず、軋識は大声でツツコミをいれた。

それは間違いなく軋識の本音でもあったのだが、当たり前のように満場一致で無視をされる。

ひそかに一賊の大將としての自信をなくしかける軋識だった。

軋識がスパイラルしているその横で、永識と双識は力強く握手していた。

「同好の志よ！」

私は感動した・・・っ！

如何なる時も『萌え』を忘れぬその姿——尊敬に値する！！」

「うふふ——ありがとう、と言っておこうか。

君のような先人に認められるというのは、単純に胸があつくなるよ」

独り静かに場を見つめていた曲識は、軋識の方を見て聞いた。

「で——結局、『仕舞う』とは何だったんだ、アス？

二人の会話は少々難しくてな・・・だが、年長者に学ぶのも若人の権利だろう。

——悪くない」

「いや・・・まだ説明も何もしてないっちゃよ？」

曲識はきよとんとした。

「おかしいことを言わないでくれ、アス。

レンがあんな分り合いオーラを出しているんだ。

きつとなにか、感動的な意味があったんだろう？」

根拠も理由もなく、言い切った。

（逆だっちゃ。

レンがトキの言うようなシリアスシーンで、あんなオーラ出せるわけがないんだっちゃ・・・！）

処理能力の限界に達した軋識は、大きく溜め息をついた。

だから、仕方なかったのだ。

突然歌い出した曲識を止められなかったのは――――

第四話 「もうホント黙れっちゃ！」 上（後書き）

更新遅くなってすいません！

少し受験関係で時間がとれず・・・

一月～三月は不定期になってしまうかもしれませんが、できるだけ週一ペースでアップしたいと思います。

この話は長かったので、上下に分けてみました。

（タイトルネタの関係もあったりするわけですがw）

あと、「・・・」を三ポイントにするべきか迷っています。

ご意見お待ちしております。

第四話 「もうホントだまれっちゃ！」 下

年長者二人が答えてくれないので、曲識は仕方なく直接聞くことにする。

もちろん全力で歌ってから。

『少年、僕にも分かるように説明してくれないか？』

静かな声で。

しかし、逆らえぬ声で、聞く。

空気をふるわせる、意志ある声は、少しずつ重ねられた音に命を吹き込み——！？

双識と握手をした格好のまま永識の動きが止まる。

決定的に。圧倒的に。核心的に。

「悪くない。

正直、少年に通じるか心配だったが・・・杞憂だったらしい。

人であろうとなかろうと、音楽を愛する心は変わらない、ということか。

殺人鬼であり音楽家である僕がいるのだから、それも当然なのか？」

悪くない——、曲識はつぶやいた。

「音遣い・・・、それも精神感応型というわけかね。

『呪い名』を見ているようで少々気分が悪い」

「僕は似ているかもしれないが、『呪い名』などではないさ。

もつとも——劣っているつもりはないが」

曲識は自信をもって宣言した。

「はははっ！

愉快、愉快。

まったく、流石零崎と言わせて貰おう。

もとより親類に隠すつもりはない。

一から十まで説明しよう。

その前に、この鎖解いてもいいかね？」

（いいかね、ってお願いじゃなくて許可を求めているようだけれど・
・・・）

双識は永識の様子に疑問を覚えた。

ふわふわしているようで、一応しっかり話を聞いている双識だった。

「ああ。」

今、と――」

「その必要はない」

曲識の言葉をさえぎった永識は、大きく伸びをした。
音によって縛られていたはずの、永識が。

「ん？」

何か、驚かせるようなことをしたかね。

ああ――、『仕舞う』ことについてだったか。

ふむ、どこから話すべきか・・・。

そうだな、私は、零崎永識は、戦国時代生まれだ。

その500年を超える永い時間、私は何をしていたと思う？」

「零崎を『仕舞って』いた、っちゃか・・・？」

軋識がおそろおそろ尋ねると、永識は大きく頷いた。

「その通り。」

私はね——一賊の親類のことが好きだった。

愛していた、ともいえる。

だから・・・それが過去のものになってしまるのが許せなかった！

忘れ去られるなんて耐えられなかった。

私は考えたよ。そして思いついた。

私が彼らのことを永遠に忘れなければいい、とね。

以来、私は今までに出逢った全ての零崎を記憶している。

そして、その記憶するということを『仕舞う』と呼んでいるのだよ。

さて——改めて聞こう。

君らの零崎を、私の記憶に刻ませてはもらえないかね？」

軋識はやっと理解した。

零崎永識という殺人鬼を。

「ようするに・・・、零崎専門のストーカー、ってことっちゃね？」

「違うわっ！

・・・違わなくないが、イントネーションというか何かがっ！」

否定するものの、永識自身、そうかも思っているため説得力がない。

「なるほどね、良く分かったよ、永識くん。

けどね、いくら家族といえどただでストーカーさせてやるのはつまらない。

だから、交換条件だ。

伊織ちゃんのコスプレ写真を持ってこれたら、君の使命とやらに協力してあげよう」

第四話 「もうホントだまれっちゃ！」 下（後書き）

お久しぶりです、壱厘です。

PVがついに、2000をこえました！

これからも皆さんに、面白いと思って貰えるようがんばっていきたいと思います。

アドバイスなどお待ちしております！

第五話 「零崎くんと伊織っちじゃねーか」

ある郊外の安アパートの一室。

そこでは数ヶ月前から、二人の殺人鬼が暮らしていた。

「人識くん、この方誰です？」

「俺だって知りてーよ！」

彼らが相對しているのは、謎の黒づくめの不法侵入者。

一応『殺し名』である二人なので、カギの掛け忘れなどはしない。恐らくは、壊すかピッキングしたのだろう。

しかし、そんなことは大した問題ではない。

問題なのは・・・、

（俺がまったくその気配に気付かなかった、つーことだ。

俺は別に気を抜いたりしちゃいなかった。なのに、扉が開くその瞬間まで、こいつがそこにいることがわからなかった）

それは、異常だ。

人識はやや特殊とはいえ「零崎」なのである。

殺意や気配を読むことに関してはプレイヤーの中でも最も優れている。

「人類最強レベルか、それとも何か裏があるのか。

後者だと信じてるぜ・・・」

その異常な状況において、人識はしかし、軽口を叩くほどの余裕があった。

不意打ちを受けていないなら、やりようはある。そもそも、この黒づくめが敵とは限らない。

「あーっと、そこの黒づくめさん？俺らに何の用だ？」

人識は黒づくめに、まともな会話が通じることを信じて声をかけた。
通じない奴というのは、例えば勾宮出夢であったり、西条玉藻であったりする。

（こう考えてみると、俺ってつくづく友人運ねーよな。欠陥製品は・・・、あれって友達なのかね？）

だが、一安心。

黒づくめは話の通じる奴だったようだ。

「ふむ。私の親類とお見受けする。

零崎人識と零崎舞織であっているかね？」

「ああ、俺が零崎人識だ」

俺の名前を知っているのは不思議じゃない。

しかし。

なぜこいつが「零崎舞織」の名前を知っている・・・!?

（伊織ちゃんはもとの名前を捨てていない。

零崎名は俺と兄貴以外知らないはず。

ということは――これは兄貴関係のトラブル!）

そのことに気付いたのか、伊織も謎の黒づくめを凝視する。

「俺は名乗ったぜ。

あんたは・・・一体何者だ？」

「む、失礼した。

私は零崎永識という。

諸事情あって、舞織のコスプレ写真を撮らせて貰いに来た」

「いきなり呼び捨てっ!?

とゆーかコスプレって何ですか!?

双識さんみたいなこと言わないでくださいよう!」

シリアスな空気ぶち壊しだった。

「どうしてもダメか？

双識殿の頼みでな。

実力行使は避けたいものなのだが」

「なおさら嫌です」

伊織はきっぱりぱっさり言い切った。

永識は困ったように辺りを見回す。

その目は、ここで戦闘になっても大丈夫か確かめているようでもあった。

「あー、永識ったか？

一応言っとくぜ。

俺は兄貴以外を家族と思ったことはない。

・・・伊織ちゃんに手を出すつもりなら、殺して解して並べて揃えて晒してやんぜ」

永識は少し驚きを見せた。

「ほう・・・。

私の親類よ、では舞織も家族ではないと？」

「たりめーだ。

勘違いしてんじゃねーぜ。

伊織ちゃんは、兄貴から頼まれたから面倒みてるだけだ」

人識が答えると、永識は一瞬ポカンとして、それから笑いだした。

「素直に驚いたよ・・・こんな感覚数十年ぶりではないかな？

・・・つく、それにしても、今どき「勘違いするな」とは・・・。

この言葉をカッコイイと思って使うやつが、まだいたとはな」

ある意味では年相応の少年らしく、朗らかに笑う。

気がすんだのか、永識は二人に向かって礼をした。

「いやいや失礼した。

実力行使は止めにしておこう。
先程の件もあるし、私は出来るだけ零崎を再生するのは避けたいの
でね。

何より性に合わん。

無理矢理よりは合意の上の方がイイ写真が撮れる・・・！

というわけで、だ。

舞織、コスプレ写真を——」

「私になにを期待しているんですかっ!？」

言いながらカメラを手になじり寄ってくる永識に、人識の後ろに
隠れた伊織が怯える。

なんとも平和だった。殺人鬼の鬼口密度はかなり高いはずなのに。

そして。

永識は吹き飛んだ。 否——吹き飛ばされた。

「はぁ!？」 「え!？」

永識が壁に激突する憐れな音が響く。

けれど二人はそちらを見ることができなかった。

——ソレは特別すぎた。

「あ・・・、あああ、あいかわのおねーさん・・・!!」

伊織ちゃんの恐怖と混乱がブレンドされた声を聞きながら、俺は

逃げる方法を必死に探していた。

（どうしてこんなトコに出てくんだよ！？

ラスボスはラスボスらしく、魔王の城かどこかで勇者を待ってるよ
！！）

「んー、どっかで見た顔だと思ったら、零崎くんと伊織っちじゃね
ーか。

おひさー、なんつってな」

ニヒルな笑みを浮かべて、哀川潤がそこにいた。

第五話 「零崎くんと伊織っちじゃねーか」 (後書き)

やっと人識くんと伊織ちゃんを出すことができました。
レン、アス、トキの三人はしばらくお休みです。

次回から少しずつオリキャラも増えていく予定です。

感想、アドバイスお待ちしております！

第六話 「中学生、ですか？」

人類最強の請負人、哀川潤。

死色の真紅、赤き征裁、一騎当千、疾風怒濤、赤笑虎、砂漠の鷹・
・数々の二つ名をもち、その名は四つの世界全てに轟いている。

生きた伝説ともいえる彼女が、なぜこのようなボロアパートにやつてきたのか・・・？

「おう、失礼するぜ」

さも当たり前のように、哀川潤は、自分が破壊した壁の穴を通して人識の前に座り込んだ。

・・・破壊した壁の穴？

哀川潤の登場のせいで気付かなかったが、隣りの部屋と人識たちの部屋を隔てる壁に、人が2，3人は余裕で通れそうな穴が空いていた。永識は、この穴を開けるときの衝撃で吹っ飛ばされたらしい。

「潤センパイ、オレらもはいいんすか？」

穴の向こうから声がする。

（二人——いや、二人か？

・・・向こうの部屋の住人じゃねーだろうな、これは。
どうすんだよこの壁の穴・・・）

正直、人識たちの生活にこれを直すような余裕はない。

人識が一人たそがれていると、哀川は勝手に声の主たちを呼ぶ。

「いーぜいーぜ、入れよ二人とも。」

こいつら殺人鬼だけど、実害ねーし」

ひどい扱いだった。

伊織は部屋に入ってきた二人をみて目を丸くする。

「中学生、ですか？」

二人は永識と（外見上は）同年代、すなわち中学生ぐらいの歳のようだ。

ジャージを着た少年と白いワンピースの少女である。二人は双子なのだろうか、とても良く似ている。しかし——雰囲気は真逆だった。

「その通りっすよ、伊織センパイ。」

あ、オレ、四季崎夏目と申しますっ！

伊織センパイと人識センパイのことは前から聞いてて・・・めっちゃ会いたかったんすよ！

なっ、冬希？」

「・・・うん。」

夏目・・・とても楽しみにしてた。

私も、です」

快活に少年——夏目が言うと、少女——冬希も消え入るような声で同意した。

そして、驚きの一言を口にする。

「ホント、センパイ方と一緒に京都まで行けるなんて・・・マジ感激っす！」

「はいっ!？」 「はあっ!？」

まるで兄妹のような息の合った驚き方だった。
しかし、それも当然。そんな話二人は初耳だったのだから。

「一体どういうことだ、人類最強!？」

「あたしの下僕二人が、夏目さんと冬希ちゃんを京都のいーたんの
とこまで連れてく話。
まっさーか、文句はねーよなあ？」

狂暴な笑みを哀川は浮かべる。断われそうな雰囲気ではなかった。

(欠陥製品のところまで・・・?)

なんつーか、一から十まで危険な匂しかしねーじゃねーか)

「いっきーさん関係のことなのですか?
ならば、不省、この私無桐伊織、一肌どころか千肌でも千服でも脱ぎましょう！」

もちろん人識くんも」

人識が必死に逃げようとしていたというのに、伊織の一言は見事にそれを打ち碎いた。

人識は小さく溜め息をつく、諦めの口調で言った。

「伊織ちゃん・・・あいつとどこで知り合ったんだ？
というか、俺を捲き込むな」

「いいじゃないですか、家族なんですし。
それに懐の広い哀川のおねーさんですよ？
このごろ本気でヤバイ私たちの生活水準が、少しはマシになるかも
です。」

それにいきーさんですよ！
人識くんを追っかけるのに、とても尽力していただきました・・・。
報酬が、メイド服で一日ご奉仕でいいなんて、安すぎですよ！」

伊織が力説する。それを聞いていた人識は呆れすぎて何も言えなかった。

（つーか、あいつにとってはメイドが一番のご褒美だろ・・・）

コスプレはNGなのに、メイドはいいらしい・・・複雑怪奇である。

「よしよし、二人ともやってくれんだな？」

いやー、よかったよかった。

世界滅亡レベルの依頼が同時に入っちゃうと大変なんだよなー、ほ

んとに」

二人は早速こんな依頼受けるんじゃないかと、後悔し始めるのであった。

第六話 「中学生、ですか？」（後書き）

二週間ぶりです、壱厘です。

先週は期末だったため、休ませていただきました。
来週はしっかりあげられると思います。

アドバイス、感想などお待ちしております。

伊織ちゃんと人識くんの口調が心配だ・・・

第七話 「マイブラザー」

「哀川のおねーさん、一つ聞いていいですか？」

「あん？」

「かまわねーぜ、なんでも聞けよ」

「ええとですね・・・、四季崎って、あの有名な刀鍛冶の四季崎記紀さんと関係あったりします？」

非常に珍しいことに、哀川は笑顔のまま硬直した。絶対に分からないはずのことを、あっさり言い当てられたかのように。

事実その通りなのだが・・・。

「伊織ちゃん、逆に聞け。」

「どーして記紀のことを知ってる？」

「それは、私、ふつーの女子校生やってみましたから。教科書に書いてあったというわけなのです」

「あー、そーいやそーか。」

でもよく覚えてんな、高校じゃそんなにしっかり書いてねーだろ？」

伊織は首をかしげた。

「だいたい一回読めば、頭に入っちゃいますよ？」

基本的に伊織は自覚のない天才型のようなだった。

「・・・気付かれちゃ仕方ねーか。

夏目くんと冬希ちゃん、記紀を祖とする四季崎一族の次期当主で、記紀の遺したとあるモノを受け継いでる。で、それを匂宮に狙われてるっつーわけだ」

匂宮!?

人識は驚きを隠すことができなかった。

脳裏に浮かぶ、今はもういない親友の姿を振り払い、聞く。

「匂宮・・・本家じゃないだろうな!？」

「ああ、本家は出てきてねー。

狙ってんのは分家の『松風』だ」

人識は再度耳を疑った。

なぜなら松風は匂宮における内部監査を担当する一族だからだ。

「殺し屋」の匂宮において唯一「殺し屋」でない、それが松風だ。

それを哀川に伝えると、不機嫌そうな口調でこう言った。

「んなことあたしが知るかよ。

襲ってきた奴が松風を名乗ってただけなんだから。

っーか、逆に零っちはなんで知ってるんだ?

出夢くん辺りから聞いたのか?」

「いや、出夢は関係ない。

松風に直接知り合いがいるっつーだけだ」

意外と知り合いの多い人識だった。

(とりあえず、松風が結果はともかく、殺すために動くってのはありえない)

松風はその当主いわく――

「ボクらはね、決して殺しを忌避しているというわけではないんだよ、マイブラザー。それが必要なら、ボクらはなんでもするさ。けれども、それが不必要なら、ボクらは何があろうとやらない。殺し名とか、生まれとかは関係ないんだ。

殺したくないから、殺さない――これがボくらだ。殺し名としては異端かもしれないけどね。
でも松風としての役割は、ボくらにとっての誇りなのさ。

はてさてまあ・・・殺人鬼たる君には意味なき話なんだろうけど？」

誇り。意味。理由。

プレイヤーだからこそ、曲げてはならないものがある。
零崎における家族愛のような。

もしくは――勾宮出夢における勾宮理澄のような。
そういうものが、あるのだ。

「知り合いね・・・んじゃこの件、零崎くんに任せて正解だったみてーだな。

さて、と。あたしはそろそろ行くぜ。次は火鼠の衣見つけねーとだし。

――一応、これ渡しとく。使わねーですむんなら、その方がいいけどな。

最悪の場合用ってやつだ。それに、あたしとの約束破っていいってわけでもねーから」

そう言って、哀川は優雅に部屋を出ていった。

俺の手に、一本のナイフを押し付けて。

第七話 「マイブラザー」 (後書き)

八日ぶりです、壱厘です。

こちらでは、昨日雨でしたが、今日は晴れです。

なので！ 今日こそこのラノを買いに行こうと思います！

化物語、上位に入っているでしょうか？

とても楽しみです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6861w/>

零崎永識の人間忘却

2011年11月20日18時05分発行